

土佐のわらべ

第397号 《第419回（2014. 9. 11）子どもの本の読書会記録》参加者4名・文書参加5名

『ヒットラーのむすめ』 ジャッキー・フレンチ／作 さくまゆみこ／訳 鈴木出版

この本を読みたいと思ったのは、「題」が私の好奇心をかりたてて、ヒットラーの娘は現実にかいたのかそれとも作り話かどうかを、早く読んで確かめたかったからです。

今回の子どもの本の舞台はオーストラリアとドイツで、作者はシドニー生まれのジャッキー・フレンチ。『ヒットラーのむすめ』は、訳者のあとがきにも書かれている通り、本当にいたのかどうかわからない謎の少女ハイジと、ハイジの物語にひき込まれていく現代の少年マークをつなげることによって、第二次世界大戦の時代と私達が生きている今の時代をうまくつなげている。

物語は、雨の降る日の朝、バスの待合所で「お話ゲーム」としてアンナが自分から話し始めた。

この物語の主人公ハイジは、顔に大きな赤いあざがあり、片足がもう片足より短かったから、少し足をひきずっていたが、恵まれた環境で、家庭教師ゲルバー先生と暮らしていた。しかし彼女には、やりたいことは沢山あったけど、何ひとつ出来なくて、父のこともデュフィとしか呼べなかった。

戦争が激しくなって来たので、父のいるベルリンの地下へ連れてこられたハイジ。しかし、ある日、外へ連れていかれ、ひとりで逃げることになってしまう。少しずつ進むごとに、古い自分を脱ぎ捨てているような気がしてきたし、古い自分は砲弾や煙や炎によって、焼き尽くされてしまった。デュフィの娘は消え、ゲルバー先生が育てようとしていたいい子は消え、残っているのは奥深く小さな種のようにひそんでいたハイジ自身。彼女は生きのびることで、その種も伸びて育っていくと思った。逃げている途中で穴の中に落ち、シュミット夫人に助けられ、亡

くなった娘の名前をもらってヘルガ・シュミットになり、みんなでオーストラリアに移住してきた。

難民の人達は、家族以外は何もかも失っていたから、シュミット氏はハイジのことを“神様からの贈り物”だと言った。それから彼女は大学に入り、医者となって幸福な人生をおくった。

今も世界のどこかで戦争があり、大量虐殺もある。忙しさの中で大切なものを見失わない為にも、ニュースを聞いたりデモに行ったり署名活動をするラターさんのように、現実を目をそむけないように気をつけなければと思った。また、人は誰でも心の中にしまっておく秘密があり、ハイジも人に言えない苦しさがあったと思うが、しかし彼女は亡くなる前に孫娘にそのことを話した。それはただのお話、空想の話として。

読書会の皆様の感想は

・ハイジがアンナのおばあさんで、死ぬ前にその秘密を話したというのは現実味を帯びていて、本当にヒットラーのむすめがいたんじゃないかと思わせる程でした。

・『ヒットラーのむすめ』をはじめ、このシリーズは秀作です。

・今月の本は、表紙と題名を見ただけでは全く想像できないお話でした。

・この本は、マークのように次から次へとお話を聞きたくなり、最後まであきさせない内容の本でした。そして、あまり暗くなく心に残るいい本でした。

・「見たり聞いたりするのを避けているうちに事態が進んで気づいた時はもう遅かった」というこの言葉は、今、私達が生きている現在にも通じることです。

(Y. A)